

# 鹿児島県三島・十島における明治中期の物資流通について

－ 笹森儀助『拾島状況録』を中心として－

渡 辺 芳 郎

## はじめに

筆者は、2012年と2013年、鹿児島県三島村および十島村の近世を中心とした考古学的踏査を実施した。その成果の一部はすでに報告しているが、その中で、近世における陶磁器流通のルートと形態について予察を述べた。つまり近世三島では、年貢船や御用船などによる、鹿児島本土地域との公的航海に付随して、物品の贈答や依頼品の購入などの個別的な契機により、陶磁器が島嶼に持ち込まれた可能性を指摘した。しかし近世における物資流通に関する同時代史料は、筆者の力量不足もあり、いまだ十分に調査していない。そこで明治中期の三島・十島の様相を伝える笹森儀助の『拾島状況録』を手がかりとしながら、それ以外にも漁船などによる、より多様な流通ルートが存在した可能性もあわせて予想した（渡辺2014）。

ただし前稿では『拾島状況録』中の三島の記述のみを取り上げており、十島については触れていない。そこで本稿では三島とともに十島の物資流通に関する記述の整理を通じて、近世におけるその復元の手がかりを得ることを目的としたい<sup>(1)</sup>。

なお現在は三島村（竹島・硫黄島・黒島）と十島村（口之島・中之島・臥蛇島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島・小宝島）は別の行政単位であるが、本稿で扱う『拾島状況録』の時代、つまり明治28年（1895）においては、両村をあわせて「十島」というひとつの行政単位であった。本稿では混乱を避けるために、以下とくに断らない限り、「三島」「十島」という呼称を現在の行政区分に基づいて用いたい（図1参照）。

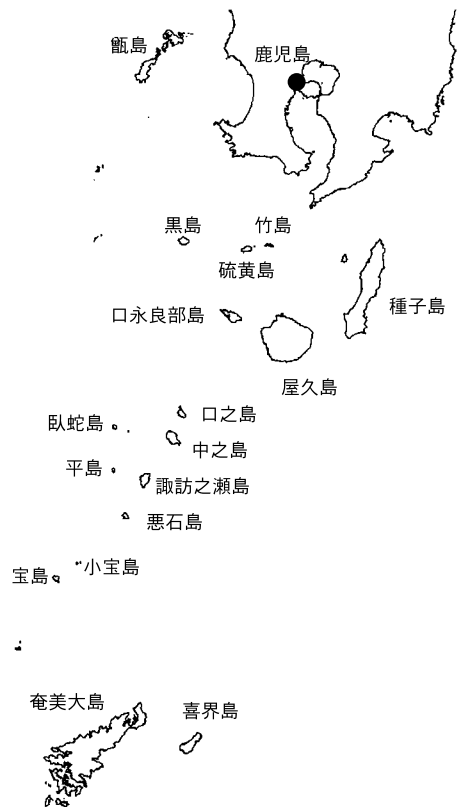


図1 関係地図

## 1. 笹森儀助と『拾島状況録』について<sup>(2)</sup>

笹森儀助は、弘化2年（1845）陸奥国弘前在府町（現青森県弘前市）に士族の子として生まれる。明治初期、青森県の地方行政官を勤めるが、明治14年（1881）に退職。旧士族の授産を目的とした牧場経営会社・農牧社を設立、副社長・社長に就任する。同25年（1892）退職。

同年、千島列島を探検し、その内容を『千島探験』にまとめる。その翌年、沖縄に渡り、沖縄諸島、八重山諸島を探検し、当時の沖縄の様子を詳しく伝える『南嶋探験』（笹森（東校注）1982・1983）を執筆する。同書はすぐれた民族誌としても高く評価されている。同27年（1894）、その経験が買われ、奄美大島島司に就任する。28年、当時、島司の管轄下にあった「十島」、現在の三島村と十島村を視察し、さらに29年には日清戦争で日本の領土となった台湾を視察している。同31年（1898）辞任。

その後、明治32～34年（1899～1901）年には朝鮮に渡り、帰国後の翌年には第二代の青森市長に就任。また私立青森商業補習夜学校を設立、初代校長となっている。同36年（1903）市長を辞任し、大正4年（1915）死去。享年70歳。

『拾島状況録』とは、先述した三島・十島の視察報告である。明治28年4月27日に奄美を出発し、8月27日に帰島するまでの4ヶ月間に渡る行程である（表1）<sup>(3)</sup>。定期船などがなかった当時、漁船を借り上げながらの渡航は困難をきわめたという。

『拾島状況録』は「竹島記」「硫黄島記」「黒島記」「口之島記」「中之島記」「臥蛇島記」「平島記」「諏訪之瀬記」「悪石島記」「宝島記」よりなる。途中、口之永良部島にも立ち寄っているが、当時、同島は種子島庁の管轄だったせいか含まれておらず、また小宝島に関しては「宝島記」に包括されている。各島の記述の体裁はほぼ統一されているが、島ごとに若干の異同もある。代表的な項目を整理すると以下のようになる。

表1 関係年表

明治28年	行 程
4月27日	06:00奄美大島発
4月28日	10:00鹿児島着
5月3日	10:00鹿児島発、17:00知覧着
5月4日	10:00知覧発、12:00枕崎着
5月11日	10:30枕崎発、16:30竹島着
5月14日	15:00竹島発、16:50硫黄島着
5月20日	10:30硫黄島発、15:00黒島（大里）着
5月22日	07:35大里発、10:10片泊（黒島）着
5月28日	11:40片泊発
5月29日	02:20口之永良部島着
5月31日	09:30口之永良部発、16:35口之島着
6月4日	10:00口之島発、12:00中之島着
6月18日	09:00中之島発、14:30臥蛇島着
6月28日	09:00臥蛇島発、17:00平島着
7月11日	07:30平島発、11:25諏訪之瀬島着
8月5日	10:00諏訪之瀬島発、13:00悪石島着
8月11日	09:00悪石島発、小宝島上陸、20:30宝島着
8月26日	08:35宝島発
8月27日	08:40名瀬港着

第一編 土地：「地形、山岳、沿岸、港湾」「山林、原野、耕地、道路、用水、地質、温泉、池沼、洞窟」

「村落」「潮流」「古跡」「家畜類及自然、獣鳥類、虫類」<sup>(4)</sup>

第二編 住民：「沿革」「産業」「生活」「財産」「売買及交換」「貸借」「島外（ヨリ）ノ収入」「租税及公費」「風俗」「体格」「疾病」「教育」「智識」「行（交）通」<sup>(5)</sup>

第三編 村治：「行政組織」「村民協議会」「（村中）規約」

第四編 寺社：「寺院」「神社」「神仏崇信」

第五編 雑件：「犯罪及訴訟」「書信」「吏員渡航」「徴兵」「災害」「菓樹」「難破船」「変死」

以上のように『拾島状況録』の内容は、社会・文化・歴史など幅広い分野に渡っているが、本稿では、この中から商業活動や物資流通、陶磁器に関する記述を抽出し、明治中期の三島・十島におけるそれらの様相について整理、検討したい。

## 2. 『拾島状況録』に見られる物資流通

『拾島状況録』（以下『状況録』と略称）における商業活動や物資流通、陶磁器に関する記述を抽出して整理したものが表2である。以下、この表に基づきながら論を進めたい。なお表2各欄には便宜的に①～②④の数字を当てており、下記本文中で示されたそれと一致する。

### (1) 各島嶼における商業活動

まず各島における商業活動であるが、諏訪之瀬島(①⑥)を除いて、「商估(商店)」がなく、「行商人」も来ることはないとされている(①④⑥⑧⑩⑬⑮⑲⑳)。島によっては個別に行商人の来訪を記述しているが(④⑮⑲)、そのことは逆に行商人の来島が珍しかったことを示していよう。つまり三島・十島の人々は日常的に陶磁器を含めた日用品を購入する機会がほとんどなかったと言える。

### (2) 日用品の入手方法

では島民はどのようにして日用品を入手していたのか。そのあり方は三島と十島とではやや異なる。

#### (2-1) 三島

三島においては、造船のための「金主」が枕崎や加世田などにおり、島民は彼らに鰯節などを売却する見返りに日用品の供給を受けていたことが、竹島や黒島における記述に見られる(②⑦)。供給される物資が、基本的に金主が入手しえるそれに限定される傾向にあったことが想像されよう。ただしこのようなあり方は明治以後のこととされており(松永1972 p.446)、近世にはさかのぼらせることは難しい。

金主から供給された物資の具体的な内容については、竹島に「明治一六年十二月二十二日／所中江諸品物渡付帳／今塩屋森山清八方／竹島元中」という文書が残っており、枕崎の森山清八に鰯節を納めた際の「見返品」が記載されている(表3、三島村誌編纂委員会編1990 pp.302-303)。食品から衣料、細々とした日用品、薬など、竹島の人々が金主からの供給品に大きく依存していたことがうかがいしれる。またその中には陶磁器の碗・皿類も含まれており、詳細は不明ながら、明治中期の竹島の日用陶磁器の流通状況を知る手がかりとなる。

表2 『拾島状況録』における物資流通関係記事抜粋

	商業活動	日用品の購入方法	陶磁器の記述	その他
三島	竹島	<p>②而シテ毎年収獲スル鰹節 其他ノ海産物及菜種ノ収獲ヲ容ルルノ約束ヲ以テ、枕崎ノ金主ヨリ島中需要ノ物品ヲ前買シ、其報酬トシテ海産物ニ在テハ代価ノ貳割、農産物ニ在テハ其壹割ヲ金主ニ納ム。日用物品ハ金主ノ仕入ヲ受ケ」(p.124)</p> <p>「島民ノ需要ハ何レモ枕崎ニ仰キ、金主ノ供給スル処アリ」(p.125)</p> <p>「竹島ヨリ内地ニ航スルノ地ハ一ニ枕崎ニシテ、毎年旧暦二三月一度、旧五六月一度、十月又ハ十一月一度、其他荷渡船（松魚船造り）ヲ以テ渡航シ、主トシテ漁獲ノ海産物ヲ金主ニ納シ、米穀其他ノ日用諸品ヲ仕入シテ帰ル。時トシテハ一ケ年二回ノ外渡航セサルコトアリ。其他内地へ渡航スルコトナシ」(p.130)</p>	<p>③（聖神社）「陶器類多数ヲ納ム。其内朽葉色、青磁、梓色ノ小皿七個ト白色ノ大碗、年代古キカ如シ。其他見ルヘキモノナシ」(p.134)</p>	
	硫黄島	<p>⑤「本島古来内地トノ行（交）通、拾島中尤モ頻繁ナルヲ以テ、日用什器ハ常ニ内地ヨリ輸入スル便ヲ得」(p.142)</p> <p>「島民日常ノ物品ハ其大部を鹿児島ヨリ輸入ス。硫黄運搬船ノ交通アレハナリ。然ルニ海産物ハ金主ノ所在地タル枕崎及加世田ニ輸出シ、他ニ之ヲ輸スヲ許サス。之レ配当ヲ要スレハナリ」(p.144)</p>		
	黒島	<p>⑦「需要ハ枕崎若クハ鹿児島ニ就キ之ヲ購ヒ若シクハ漁船ニ托シ、購求スルコトアリ。其便硫黄島ニ及ハサル事遠キモ、竹島ニ譲ルコトナシ」(p.157)</p> <p>「島民ノ需要ハ枕崎ニ金主ヲ措キ、毎年每家ノ需要ヲ受ク。其代価ハ約シテ卸売ノ価額ヲ以テシ、鰹節ヲ納メテ出入ヲ相殺ス、故ニ鰹節ニ在テハ他ニ売買スルヲ許サス」(p.158)</p>		

十島	口之島	⑧「島中商人ナク又行商人ノ来リタル事ナキヲ以テ売賣ナク、又土人相互中ノ売賣全クナク、又島中各種ノ交換行レス」(p.177)	⑨「毎年三月ノ末四月ノ初メニ於テ一度、十月頃一度、海産物或ハ自然生ノ木耳(キクラゲ)ヲ積テ、鹿兒島ニ渡航販売シ、島中ノ需要品ヲ仕入ス」(p.181)		
	中之島	⑩「島中商人ナク、又曾テ行商人ノ来リタルコトナシ」(p.195)	⑪「本島ハ口之島ト同ク、内地ニ金主ヲ措ス、故ニ漁獲ノ海産物等ハ毎年一回又は二回鹿兒島ニ輸出シ、一ヶ年ノ需要品ヲ買入ルヲ例トス」(p.194)		⑫「其他材木ヲ口之島、平島、諏訪ノ瀬島、臥蛇島、悪石島ニ、刳舟ヲ口之島ヲ除クノ外ノ四島ニ、又時トシテ材木ヲ沖縄人ニ、蘭筵ヲ臥蛇島若シクハ漁船ノ寄港スル者ニ売却スルノ外、売賣スル者ナシ」(p.194)
	臥蛇島	⑬「廿二三年間内地ヨリ船ヲ仕立テ、穀物若クハ反物等ヲ搭載シ来リタル商人アリシカ、爾后絶エ之ナク、亦島内商業ヲ為スモノナシ」(p.209) 「土地ニ商業ヲ為スモノナシ。又曾テ枕崎ノ商人某反物、茶、小間物等ヲ積ミ行商ニ来リシコトアリシカ、当時之ヲ買入ル者寡ク、爾后又来ラスト云フ」(p.224)	⑭「一カ年ノ需要ハ鹿兒島若クハ枕崎ニ渡航ノ時仕入ルモノナリト云フ」(p.209) 「島中相互間金銭ヲ以テ売賣、若クハ交換スルコトナシ。島中ノ需要ハ鹿兒島、枕崎若クハ大島ノ土地ノ海産物ヲ搭載渡航シテ、輸出物品ノ価額ニ応シ、相当ノ物品ヲ購求シテ還ル」(p.224)	⑮「宗社ヲ八幡宮ト云フ。(中略)自然石若クハ貝殻ヲ蔵メテ神体ト為シ、陶器少許ヲ納ムレトモ、言フニ足ルヘキモノヲ見ス」(p.230)	
	諏訪ノ瀬島	⑯「本島、他島ト異リ島中相互ニ売賣ヲ為ス。(中略)然ルニ明治二十四年ヨリ、口ノ永良部島ノ商人袈裟助ナル者、毎年一回又ハ二回茶、油、米、大豆、反物、煙草、摺付木、□若クハ糸類、味噌、醤油、塩等ノ類ヲ、其自船鰹船ニ搭載シ来リ、砂糖ト交換シ若クハ現金ヲ以テ売却シ、砂糖ヲ買入レ販航ス」(p.254)	⑰「島中ノ需要ハ毎年一回或ハ二回収穫ノ砂糖ヲ、大島ニ輸出シ、其代価ヲ以テ購求スルヲ例トス」(p.254)		
	悪石島	⑱「其他土地ニ商人ナク、必要ヲ生シタルトキ相互ニ之ヲ融通スル事、他島ニ於ルカ如シ。又廿年七月、口之永良部島寄留給黎ノ商人、鈴木四郎助船ヲ仕立テテ米、茶、烟草及布其他日用諸品ヲ搭載シテ行商シ、廿六年一回、廿八年亦一回、同上ノ諸品ヲ携帯シテ来ル。廿五年口之永良部島寄留加世田ノ商人清水袈裟五郎一回、廿四年谿山ノ商人児玉仙次郎同ク一回、同上ノ諸品ヲ携帯シテ来リ、鰹節ト交換シ又ハ売賣セリ」(p.267)	⑲「毎年鹿兒島ニ渡航シ、土地ノ物産ヲ販売シ、一カ年ノ需要物品ヲ購求スルノ例ナリシガ、近来毎年六月末ヨリ八月初頃一回大島ニ渡航シ、其売賣ヲナセリ」(p.267)	⑳「本島、宗社ヲ八幡宮ト云フ。(中略)神体ヲ備エス、古鏡方形壹個、円形四個、同ク柄付六個、貝殻、花瓶、皿、茶碗等ヲ納ム。陶器類中見ルヘキモノナシ」(pp.272-3)	

十島	<p>②「島人互ニ売買ヲスルコトアルノ外、全ク売買ナルモノナシ。商人ハ明治十六年、内地商人船ヲ仕立テ反布、茶、其他ノ雜品ヲ搭載シ行商ニ来リタルコトアリシカ、左程商売モナカリシ。爾后来ラス。島中ニ於テハ素ヨリ常住ノ商人ナキナリ。然ルニ大島ヨリ時ニ甘藷若クハ牛ヲ買入イ来ル事アリ。亦本島ノモノニシテ、大島沖繩間ヲ商売セシモノ一人アリシカ、今之ヲ中止シタリト。小宝島ハ魚類、枇榔蓑等ヲ搭載シ、大島ニ渡航シ之ヲ売却シ、其用品ヲ仕入ル事、本島ニ同シ。然シテ島中売買等ナキ事勿論ナリ」(pp.285-6)</p>	<p>②「藩代毎年一回郡司上魔セシカ故ニ、鹿児島ニ渡航シ、売買ヲ為シ、爾后亦然リシカ、明治十九年ヨリ鹿児島渡航ヲ罷メ、一ヶ年三四回或ハ四回大島ニ航シ、砂糖、牛、屋久貝殻等ヲ搭載シ、之ヲ大島山下店若クハ松枝分店等ニ売却シ、島中入用ノ物品ヲ仕入レ帰ルヲ例トス」(p.285)</p>	<p>③「本島ノ宗社ヲ鎮守神社ト云フ。村落ヲ下ニ去ル大凡貳町許ノ山中ニアリ。簗竹ヲ以テ家ヲ造リ、花瓶数百個ヲ納ム。之レ鹿児島渡航ヲ終ヘ販リタル時寄進セシ処ナリト。共ニ粗品ニシテ見ルヘキモノナシ。其他神体神具ヲ納メス」(p.293)</p>	<p>④「藩代以来毎年一回百貳拾貳石積(拾四反帆、巾壹丈七尺、長不明)ノ船ヲ以テ、六月頃上魔、九、十月頃飯島シ、大島ヘハ牛ヲ積み、毎年一回渡航スルノミナリシカ、明治十九年以来全ク大島渡航スルコトナリ、(中略)之同年ヨリ大島ニ於テ売買ノ用便ヲ為シ得ベキニ至リタルカ故ナルト、航海ノ容易ナルトニ依レリ」(p.291)</p>
----	--	---	---	--

※表中のページ数は笹森1968より。

表3 明治16年(1883)の経節売却の「見返品」

食品等	衣料等	日用品等
真米一俵(一円五五錢八厘) 昆布一斤(五錢) 餅米六升(二九錢四厘) 茶一斤(二二錢) 素麵五百目(一三錢六厘) 大豆一斗五升(六七錢五厘)	上島一反(五六錢) 中島一反(五〇錢) 形付一反(七四錢) 打綿一反掛(二二錢) 白地木綿一反(三一錢) かすり縞一反(九五錢) ギンカケ浅黄一反(五五錢)	蠟燭四斤半(三錢) 傘一本(一八錢) はっ駄一(一四錢) 半田紙一束(十二錢五厘) 呉座三枚(三〇錢三厘) ふり一つ(四錢八厘) 百田紙二帖(六錢五厘) 仙香一〇把(一〇錢) 薬一斤(二二錢) 油一升(二〇錢) 石油四半箱(六一錢三厘) 茶茶わん一束(一六錢) 飯茶わん二束(二八錢) なら茶一束(三六錢)(奈良茶碗か?) 中皿一束(三五錢) 小皿一束(三一錢)

このほか竹島には、同島の安永善右エ門が注文した物品に関する記録もある。年代不詳であるが、「筆一〇本(一一錢)・セキ筆一〇本(四錢)・せくばん二つ(一三錢)・墨三丁(九錢)・猪口一束(九錢)・エヅキ茶家一つ(三錢五厘)・健胃固腸丸一服(一〇錢)・黒砂糖二斤・白砂糖一斤」とある。安永は明治16年(1883)に寺子屋を開き、竹島校の基礎を築いた人物であり、そのため注文品には文房具などが含まれている。また猪口や茶家(土瓶)といった陶磁器もあり、注文により物品を購入する場合もあったことがわかる(三島村誌編纂委員会編1990 p.303)。

一方、硫黄島の場合は、硫黄の運搬という、他島に比べて鹿児島本土地域とのより頻繁な往来があり、「島民日常ノ物品ハ其大部を鹿児島ヨリ輸入ス」(⑤)とある。ただし近世においては、『薩藩政要録』(文政11年(1828))に「御勝手方証文を以他国出品々之事」、つまり他国へ販売するた

めには藩の許可が必要な物品のひとつとして「硫黄」が挙げられており（鹿児島県史料刊行会編1960 p.183）、その流通については藩の支配下に置かれていたことが推測される。それゆえ硫黄運搬にともなう物資流通が近世において同様であったかどうかは不明であるが、硫黄島には三島を支配する「硫黄島在番」が置かれており（三島村誌編纂委員会編1990 p.181）、鹿児島本土との往来は、近世においても他の二島に比べ、より密であったろう。

## （2-2）十島

十島では、三島のように造船の金主がおらず（⑪）、各島の生産物（海産物や砂糖、屋久貝（ヤコウガイ）など）の出荷先の土地で日用品を購入したという（⑨⑪⑭⑰⑱⑲⑳）。ここで興味深いのは、島や時期によって出荷先が異なる点である。

口之島：鹿児島（⑨）

中之島：鹿児島（⑪）

臥蛇島：鹿児島・枕崎・奄美大島（⑭）

諏訪之瀬島：奄美大島（⑰）

悪石島：鹿児島、近來は奄美大島（⑲）

宝島：藩政時代は鹿児島だったが、明治19年（1886）以後は奄美大島（㉔㉕）<sup>6)</sup>

このうち諏訪之瀬島は文化10年（1813）の噴火により全島民が離島し、明治16年（1883）になって奄美大島の藤井富伝らが移住・開拓していることから、大島との結びつきが強いのは、そのためと考えられる。近世までさかのぼらせることはできない。

一方、近世においては、周知のように慶長14年（1609）の島津氏の琉球侵攻以来、奄美諸島までは藩の直轄地になっており、当然、十島も藩の支配を受けている。宝島の記事（㉔）は、鹿児島との往来が当時の公的ルートであったことを示しているよう。

ところで『十島村誌』には元治元年（1864）6月24日から慶応2年（1866）4月20日までの約2年間における中之島をめぐる公用船の往来が整理されている（十島村誌編集委員会編1995 pp.614-621）。それをまとめると表4になる。もっとも多いのが中之島・悪石島間で、53例（57.0%）にのぼり、ついで中之島・口之島間の24例（25.8%）となり、両方で8割以上を占める。近世においては口之島・中之島・宝島に「在番」が置かれており、十島の行政の中心であったが、幕末期には悪石島にも置かれたようである（十島村誌編集委員会編1995 pp.616）。上記の

表4 中之島をめぐる公用船の往来  
(1864-66年)

航路	回数	比率
中之島→悪石島	49	52.7%
悪石島→中之島	4	4.3%
中之島→口之島	24	25.8%
中之島→平島	3	3.2%
平島→中之島	2	2.2%
中之島→諏訪之瀬島	5	5.4%
中之島→臥蛇島	4	4.3%
中之島→鹿児島	1	1.1%
不明→中之島	1	1.1%
計	93	

往来頻度の高さは、そのような行政的な状況を反映していると言える。また回数こそ少ないものの鹿児島への渡航は重要であったろう。さらに諏訪之瀬島に公用船が派遣されていることは、同時期、無人島であったとされる同島に、なんらかの形で人が居住していた可能性を示唆している（同

上p.621)。このような公用船の渡航にさまざまな物資流通が付随したことは、たとえば与論島の役人の日記などからうかがいしれる（先田編著2012 pp.127-128など）。

このほか鹿児島・琉球間の米穀などの輸送船に、十島の船乗りが関わっていた。元文5年（1740）に鹿児島を発した薩摩船は、琉球に着いた後、久米島へ向かう途中で遭難し、清国・舟山列島に漂着した。寛保2年（1742）に長崎に戻ってきた彼らの調書と推測される「薩州船清国漂流談」（山下編1992 pp. 205-21）が残っている。同書によれば、琉球で病死した「最初の船頭」である伝兵衛は「薩州諏訪之瀬島」の者で（同上p.207）<sup>(7)</sup>、また水主として「薩摩国河辺郡七島の内諏訪之瀬島」の仲兵衛（56歳）・与左衛門（35歳）・彦次郎（24歳）・覚内（44歳）・吉兵衛（38歳）の5人が乗船していた（同上p.218および松浦2013 p.322）。このような往来も、他の物資流通の重要な機会となったであろう。そしてこの場合、鹿児島からだけでなく、琉球からの物資流通の存在も考えておく必要があることを示唆している。

『状況録』の記述からわかることは、口之島・中之島といった北部の島嶼は鹿児島との結びつきが強く、南に下るとともに、鹿児島とのつながりを持ちつつも、奄美大島との結びつきが強くなる傾向があると言える。つまり宝島では「航海ノ容易ナルトニ依」り、大島への出荷を選択しており（②④）、また悪石島においても、元は鹿児島であったのが、近來、大島への渡航も始まったとしている（①⑨）。ただし近世までさかのぼると、むしろ政治的な理由から南の島嶼においても鹿児島との結びつきが強かったと推測される。しかしそれはあくまで公的なルートであり、十島の船乗りが鹿児島・琉球間の運送に関わっていたこと、また近代以後に大島との結びつきが強まることを考えると、近世においても北からだけでなく、南からの往来および物資流通があったことも想像される。また中之島の材木が島嶼間、さらに沖縄も含めて取引されているという記述（⑫）や、各島を結ぶ公用船の往来は、さらに島嶼間での重層的な交易ルートの存在を示している。

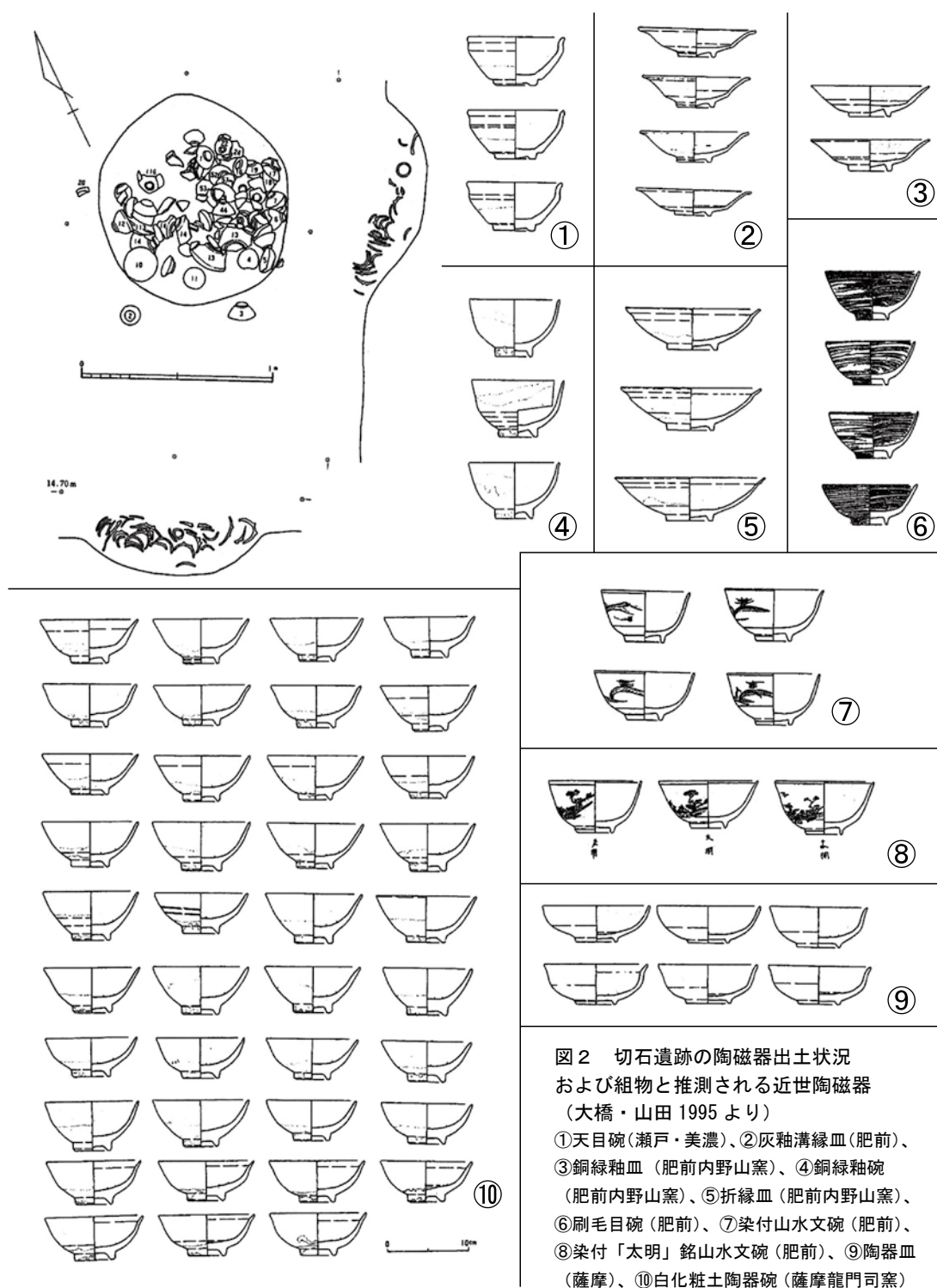
### （3）陶磁器に関する記述

各島の陶磁器のあり方については神社との関係で言及されている。竹島の聖神社（③「陶器類ヲ多数納ム」）<sup>(8)</sup>、臥蛇島の八幡宮（⑮「陶器少許ヲ納ム」）、悪石島の八幡宮（⑳「花瓶、皿、茶碗等ヲ納ム」）、宝島の鎮守神社（㉓「花瓶数百個ヲ納ム」）などである。

これら神社や祠などに納められた陶磁器は現在まで伝来しているものもあり、中世の貿易陶磁については亀井明徳が検討している。その中で亀井は、それらが当初より奉納品・祭祀品としての性格が付与されており、また生産年代・産地が散発的であることから、難破船や漂着船などの「寄船」の際に、偶発的に入手された可能性を指摘している（亀井1993 pp.34-35）。また諏訪之瀬島切石遺跡の祭祀遺構からは中世から近世にかけての中国・ベトナム・日本産陶磁器の出土が確認されている（熊本大学考古学研究室編1994、大橋・山田1995）。このほか硫黄島の熊野神社周辺および黒島大里の黒尾神社周辺では、中国産陶磁器片が多数採集されており、神社と関係があった可能性が示唆されている（橋口・若松2011a・b・2013、市村2013、渡辺2014）。

さて『状況録』において注目されるのが宝島の鎮守神社の記述で、「花瓶数百個ヲ納ム。之レ鹿児島渡航ヲ終ヘ販リタル時寄進セシ処ナリト。共ニ粗品ニシテ見ルヘキモノナシ」（㉓）とある。つまり鹿児島への渡航から無事に帰島できたことを感謝して、神社に花瓶（仏花器の類か）を奉納





する習慣があり、それが繰り返されるうちに「数百個」に達したのであろう。奉納品は、それまで使用していた日用品を転用したとは考えにくいことから、鹿児島において新たに入手したものと想像される。また「粗品」とあることから、特別なものではなく、容易に入手しうる量産品であった可能性が考えられる。陶磁器が日用品としてだけでなく、このような奉納品としても島嶼に持ち込まれていたことを示す事例と言えよう。

さらにここで諏訪之瀬島切石遺跡出土の近世陶磁器に注目したい。同遺跡では配石・積石遺構、土坑よりなる祭祀遺構が検出されており、土坑内部から138個体の陶磁器と16個体の土師器皿（灯明皿）が出土し、陶磁器について周辺出土例も含め148個体が報告・検討されている。14世紀後半から18世紀の中国磁器、ベトナム磁器、日本（瀬戸美濃・肥前・薩摩）陶磁器が出土しており、その下限は、先述したように文化10年（1813）の噴火による全島避難に設定できる（大橋・山田1995）。

切石遺跡出土の近世陶磁器の特徴として、いずれも完形率がきわめて高いこと、器種が碗・皿（鉢）に限定されること（甕・壺など貯蔵具の不在）、また同一器形・分量・文様を有する組物と推測されるものが含まれる点などが挙げられる（図2）。完形率の高さと器種の限定は、これらの陶磁器が奉納品的性格を有していた可能性を示唆する。また筆者は、熊本大学考古学研究室に保管されている同資料を観察する機会があったが（2004年6月3日）、高台皿付や碗内底部に使用痕・摩耗痕などがほとんど見られないことから、未使用に近い状態で奉納されたのではないかと考えている。このことは逆に、これらが当時の諏訪之瀬島の日用陶磁器のあり方をそのまま反映したものかどうか、疑問を残すことになる。

また組物が含まれる点について大橋・山田は、「九州本土から遠く離れた小島という性格から、頻繁に陶磁器が搬入されたのではなく、購入などの入手できる機会にまとめて入手した結果を表しているように思われる。とくに肥前陶磁をみると、佐賀県嬉野町の内野山窯の陶器が多く、取扱う商人が単一もしくはそれに近い小数（マ）のためにそうした内容的に偏った傾向が出てくるように思われる」（大橋・山田1995 p.163）と推測している。この推測は先に示したように、三島・十島において物資の入手機会が限られていたという『状況録』の記述とも符合する。

これら奉納品的性格を有すると思われる切石遺跡からの出土陶磁器は、前述した宝島・鎮守神社への奉納の記述と重ね合わせると、日用品としてではなく、あらかじめ奉納品として島内に搬入された可能性も想定できる。つまり三島・十島における陶磁器入手の契機として、日用品としてのそれとともに神社への奉納があったことが推測されるのである<sup>(9)</sup>。

### 3. まとめ

以上、『状況録』に見られる商業活動、物資流通、陶磁器に関する記述を整理し、他の史資料も含めて検討してきた。その結果をまとめると以下ようになる。

- (1) 三島・十島ともに商店・行商人の来島がなく、日用品の入手は、鹿児島の金主からの供給（三島、とくに竹島・黒島）や、鹿児島や大島への渡航に際して、個別的な注文などによって入手された。つまり三島・十島では独自の市場を形成することはなく、鹿児島や大島（あるい

は沖縄)などの市場に依存する形で物資が流通していたと言える。

- (2) 上記のような市場へのアクセスは、近世においては政治・行政的な理由から鹿児島に偏る傾向があったと推測される。しかし明治以後になると、物理的な距離が要因となり、北部の島嶼では引き続き鹿児島とのつながりが強いが、南部へ行くほど奄美大島との結びつきが強くなる傾向がある。ただし近世においても島嶼間におけるさまざまな契機による多層的な交易ルートが想定できる。

- (3) 宝島における記述および切石遺跡出土の近世陶磁器の様相から、日用品としてだけでなく神社への奉納品としても陶磁器が島に持ち込まれたことがうかがいしれる。

上記のうち (1) (2) については図3<sup>(10)</sup>ならびに以下のようにまとめられる。独自の市場を形成しない島嶼部において、その物資流通の様相は、各島嶼がアクセスする頻度の高い、より大きな市場の様相に大きく影響を受ける。そのアクセスの頻度は、地理的条件だけでなく、政治・社会的条件によって規制される。またそのアクセスの目的は必ずしも経済的なものだけではなく、政治・社会的な場合もあり、物資流通はそれに付随して注文や贈答など個別に行われることも多い。

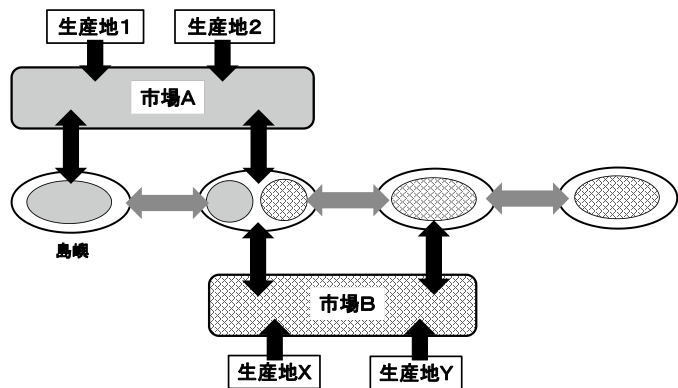


図3 島嶼における物資流通様式図

## おわりに

本稿は、2012年に実施した三島村踏査の際、竹島で泊まった民宿の女将さんに、食事のときの食器類をどのように購入したのか、とたずねたことに端を発する。島に食器を売っている店が見あたらなかったからである。女将さんからは「用事があって鹿児島に行ったときに買ってくる」「最近カタログ・ショッピングがあるので、それで注文する」という答が返ってきた。

陶磁器流通を調査研究テーマのひとつとしながら、島の人々がどのように陶磁器を入手するのか、という具体的なイメージを持っていなかった自分を恥じるとともに、改めてその入手の契機や形態について調べてみる必要性を痛感した。本稿は竹島での調査初日に発した問いに対する自分自身への(けっして完全とは言えないが)「回答」でもある。

## 謝辞

もう10年近く前になりますが、諏訪之瀬島石切遺跡出土の資料の調査に際して、木下尚子氏(熊本大学)と中村友昭氏(鹿児島市立ふるさと考古歴史館、当時熊本大学大学院生)のご高配を賜りました。また関根達人氏(弘前大学)から文献についてのご教示を得ました。記して感謝申し上げます。

## 注

- (1)『拾島状況録』に先行する三島・十島に関する明治期の記録として、明治17年（1884）の白野夏雲『七島問答』、明治20年（1887）に鹿児島県令・渡辺千秋に提出された『島嶼見聞録』（執筆者不明）があるが、両書とも、本稿で取り上げる物資流通や陶磁器に関する記述はきわめて少ない。以下、注の中で適宜触れたい。なお両書とも鹿児島大学附属図書館所蔵版を参照した。
- (2)本章の記述は青森県立郷土館編2005、東2002、横山1968を参照した。また本稿における『拾島状況録』の内容は笹森1968による。
- (3)表1は、笹森儀助自筆の『鹿児島県薩摩國 川邊郡拾島巡廻日記』に基づく東2002pp.112-123の記述を整理したものである。
- (4)「硫黄島記」と「口之島記」には「硫黄山」の項目がある。
- (5)「諏訪之瀬島記」には明治16年（1883）に奄美大島から移住した藤井富伝および移住・開拓の経緯についての詳しい記述がある。
- (6)明治17年（1884）の『七島問答』の「宝島記」の「物産」の項に、黒糖を「鹿児島ニ輸出シ年中欠乏ノ諸品ニ交易ス」とある。
- (7)ただし文末の乗員一覧では「薩摩河辺郡泊浦」の「船頭 伝兵衛」となっている（山下編1992 p.218）。この齟齬の理由は不明であるが、諏訪之瀬島の水主5人が乗船していたことは間違いなからう。
- (8)明治20年（1887）の『島嶼見聞録』によれば、聖神社には「多ク陶器類ヲ蔵ス」とある。
- (9)同一器種・文様を有する碗や皿が複数見られる状況は、十島村歴史民俗資料館（中之島）所蔵の臥蛇島伝来の近世陶磁器にも認められるが、それについては別稿で検討したい。
- (10)三島・十島では確認できなかったが、大きな市場（A・B）に直接アクセスせず／できず、島嶼間のアクセスのみで物資を入手する島嶼の存在も想定可能であるため、図3にはそのようなケースも含ませている。

## 文献

- 青森県立郷土館編2005『辺境からのまなざし 笹森儀助展』図録 同館
- 市村高男2013「中世日本の西の境界領域と黒潮トライアングル研究－鹿児島県三島村硫黄島の調査を踏まえて－」『黒潮圏科学』6-2 pp.174-187
- 大橋康二・山田康弘1995「鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』15 pp.141-164
- 鹿児島県史料刊行会編1960『薩藩政要録』鹿児島県史料集（1）鹿児島県立図書館
- 亀井明德1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11 pp.11-45
- 熊本大学考古学研究室編1994『トカラ列島の考古学的調査』十島村埋蔵文化財調査報告第1集 十島村教育委員会
- 先田光演編著2012『与論島の古文書を読む』南方新社
- 笹森儀助1968「拾島状況録」『日本庶民生活史料集成』第一巻 pp.117-299 三一書房
- 笹森儀助（東喜望校注）1982『南嶋探験1』平凡社
- 笹森儀助（東喜望校注）1983『南嶋探験2』平凡社
- 十島村誌編集委員会編1995『十島村誌』十島村
- 橋口亘・若松重弘2011a「鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」『南日本文化財研究』10 pp.1-5
- 橋口亘・若松重弘2011b「（続）鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」『南日本文化財研究』11 pp.1-5
- 橋口亘・若松重弘2013「鹿児島県三島村硫黄島採取のベトナム焼締陶器」『南日本文化財研究』17 pp.4-7
- 東喜望2002『笹森儀助の軌跡－辺界からの告発－』法政大学出版局

松浦章2013『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』関西大学東西学術研究所叢刊44 関西大学出版部

松永守道1972『三島村秘史』三島村

三島村誌編纂委員会編1990『三島村誌』三島村

山下恒夫編1992『石井研堂コレクション 江戸漂流記総集』第一巻 日本評論社

横山武夫1968「拾島状況録 解題」『日本庶民生活史料集成』第一巻 pp.117-118 三一書房

渡辺芳郎2014「鹿児島県三島村踏査報告」『鹿大史学』61 pp.15-40

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤（C））「近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究」（代表：渡辺芳郎、研究課題番号：24520860、平成24～26年度）による成果の一部である。

